

シャガールとパスキン

さまよ
彷徨えるユダヤの魂

時代は20世紀初頭。芸術の都パリには、自由な創造の場を求めて、多くの異邦人芸術家が次々と集まってきました。ピカソ、パスキン、モディリアーニ、シャガール、キスリング、スーチン、フジタ…。こうした一群の作家たちは、やがて1920年代に入ると「エコール・ド・パリ(パリ派)」という言葉をもって、呼びならわされるようになります。その頃、パリにいた芸術家はおよそ10万人、その6割以上を外国人が占めていたともいいます。そうしたなか、フランスの保守的

な芸術家たちは、我が国の芸術、そして自分たちの立場が脅かされるという、不安にかられました。

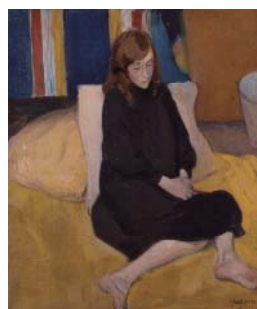
エコール・ド・パリの芸術家のなかにはまた、ユダヤの血をひく者たちが多く含まれていました。もともと定まった祖国をもたず、さまざまな国に暮らしていたユダヤ人には、その商才を生かして財を成した者もいました。しかし、19世紀終盤フランスで起こった金融恐慌とそれにつづく軍事事件をめぐり、ユダヤ人に対する反感が募っていくことになります。エコー

ル・ド・パリという呼び名が誕生した背景には、こうした、異邦人芸術家の増加に対する保守派の焦燥と反ユダヤ主義的な時代の感情とが存在していたのです。

ロシアのヴィテブスクにユダヤ人として生まれたマルク・シャガール(1887～1985)は、1910年パリに生まれました。故郷への想いや民族愛に根ざしたモチーフ、旧約聖書やギリシア神話の主題、そして寄り添う恋人たちの姿を繰り返し描きましたが、とりわけ晩年の作品には、二度にわたる大戦を生き抜いた、ユダヤ人としての精神世界が反映されるようになります。ジュール・パスキン(1885～1930)もまたユダヤ人として、ブルガリアのヴ



ジュール・パスキン〈放蕩息子〉1922年



ジュール・パスキン〈女学生〉1908年
※表紙作品



ジュール・パスキン〈三人の裸婦〉1930年

ィデンに生まれました。ミュンヘンで挿絵画家として出発したのち、1905年パリに移住。第一次大戦時に渡米し、1920年以降をふたたびパリで送りました。ユダヤと関わりの深い宗教主題も取りあげる一方で、晩年には、古典への回帰をめざした1920年代フランス画壇の風潮と呼応するようにして、伝統的な画題である裸婦作品を数多く生みだしています。

今回の展覧会では、こうしたエコール・ド・パリを象徴する二人のコ

ダヤ人画家、シャガールとパスキンにスポットを当ててご紹介します。あわせてキスリングやスーチンら他のユダヤ人画家と、ドラムやヴラマンク、ユトリロといったフランス人画家とを比較しながら、民族問題やナショナリズムを背景として展開した、両大戦間におけるフランス美術界の一断面を検証します。エコール・ド・パリ。その内には、彷徨えるユダヤの魂が、静かに息づいているのです。